

---

# ぺっぱのトンネル

むん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ぺっぱのトンネル

### 【Nコード】

N0625V

### 【作者名】

むん

### 【あらすじ】

主人公の「やまくん」、妹の「そらちゃん」、それにちよつと変わった子ねこ「ぺっぱ」の楽しい物語。

ある日、やまくん（8歳）は不思議な布団のトンネルを抜けて明るい原っぱに出る。そこは自由にぺっぱと遊べる二人だけの世界。

- - - - -

小さな二人の兄妹と育った子ねこが自分も同じ兄弟のように思っている、そんな感覚がこの物語になりました。

小説完結しました

Goodbook Project 2  
"http://goodbook.jp/newpage54.html"

ー 原っぱ

ぼくの名前は「やまは」、小学六年生。

これは本当にあった話。

ぼくの家で本当にあった話なんだ。

三年前のことだった。

妹のそらは寝てしまった。となりですうすう寝息を立ててる。もともと寝つきがいいんだけど、つかれもたまってるだろう。四月になつて、そらは小学校へあがっていた。

ぼくは安心して、トンネルをくぐり始めた。

今度はいい感じた。ネコのぺっぱといっしょに通ったときと同じ。空間がゆがんでゆくような気分……。

（んー、心がまざっていくような感じっていうか）

ぺっぱとぬけた布団のトンネル。何回通っても不思議なトンネル。ぼくの布団なんだけどね。

（今度はぬけられるだろうか……）  
胸がどきどきしてくる。

（あの原っぱに、いるんだろうか？）

胸がしめつけられるような気がしてくる。

苦しい。

せつない。

（それでも行きたい！）

ぺっぱに会いたい、そう思いながらずいぶん長いあいだトンネルの中をはっていた。

「あっ！」

小さく光る点が見えた。

光る点はまるい月のようになって、次第に大きくなる。

あの明るいの窓だ、トンネルの出口にちがいない。あの外が原っぱだ。

.....

初めてそこに行つたのは、その四か月前の十二月だった。ぼくはまだ小学二年生。ぺっぱは生まれて六カ月で、一キロぐらいの黄トラのこにやだった。(あ、こにやは子ネコのことだよ)  
そのころぼくがベッドへ行くと、いつも少しおいてぺっぱがやってきた。待っていました、というようにあらわれるんだ。  
その夜もそうだった。

そらは先にベッドに入っていた。布団を深めにかぶっているけど、こつちを見ている。

「やまちゃん、またシャツがでてるよー」

「わかつてるよ。そら。早くねろよ」

シャツをおしこみながら布団に入った。

そらは二才下の妹だ。「空音」と書いて「そらね」。まだ保育園だった。お母さんに似てしつかりもの。それはいいんだけど、ちよつとうるさい。そんなとこまで似てしまつてる。「やまちゃん、またぼんやりして」なんてよく言われる。「ちよつと空想していたんだよ」と言い返すけど、兄貴としてのメンツがないようでくやしんだ。

そんなぼくの名前は「山羽」って書く。たよりがいがないのか、そらは「やまちゃん」と呼ぶ。まるで同い年みたいだ。

そらは、いつでもあつという間に寝てしまう。ぼくもその内、うと

うとしかける。すると、ぺっぱがあらわれる。キャットドアをぬけて、「ととと」って。まくらもとにとびのって、ぼくのかたの辺りから鼻をつっこむと、おもむろに「ぐいぐいぐいっ」と布団の中に入ってくるんだ。いつものことだからあんまり気にしてない。ぼくはぺっぱがもぐりこんだくらいには寝てしまっている、と思う。でも、その夜はちがったんだ。そらは寝ちやってたけど、ぼくはまだ起きていた。そして、ぺっぱがいない気がした。

たしかに布団に入ったのに。

「あれ、ぺっぱ？」

ぼくは吸いこまれるように布団に入ってしまった。ぺっぱみたいに、頭から。

そこは、ぼくの布団のはずなのにまるでトンネルのようだった。

（へんな感じだな）

でもぺっぱが気になって、布団のトンネルをはっていった。

どのくらいの時間がたつたろう。遠くに光が見えて、トンネルをぬけた。

そこは陽だまりの小さな原っぱだった。

明るい原っぱにぺっぱがいる。真ん中に横になっていた。

「やまくんもこれなんだ。よかった！」

「うん、びっくりだな。ふともなくなっちゃったし。ここはどこ？」

応えておいて、自分におどろいた。あれ、ぺっぱと話をしてる？

んん、ぺっぱが話している？

「・・・ぼくのことば、わかるの？」

ときどきして聞いた。

「いつもわかるけど」

ぺっぱは少し不思議そうな顔をした。

「やまくんの家でも話してるよ」という。でも、ここではもっと話を通じるらしい。

「それよりね」

ぺっばはゆつくり起き上がる。胸いっぱい空気を吸ってみせた。

「なんと、立てるんだよ！」

小さな原っぱの中で、何でもなく自然に立っていた。

ぼくの目の前に両手をのばして、ぐーぱ、ぐーぱしてる。手も自由に使えてる。

ぺっばは家で不思議に思っていたらしい。何故両足で、二本足で立てないのか。両手の指が使えないのか。

「ねえ、何してあそぼう？　せつかくやまくん来たんだし」

「ようし。じゃあ、あのチョウチョをつかまえよう！」

原っぱにはチョウが飛んでいた。モンシロチョウだ。

ぼくらはチョウを追いかけた。ぺっばは四足で走っていく方が速い。そして、飛びつくとき、ぼくと同じように手をのばしている。不思議な感じだ。二人で息が切れるまで走り回った。

「こんな場所があったんだねえ。ぺっばと話せるなんてうれしいよ」  
ついに走れなると、二人であおむけに転がった。はあはあ、息をついている。

「やまくん、いつも話してるじゃないか」

「にやあとしか聞こえないもの。なんとなくはわかるけど」

「ぼくの言葉、わかりづらいんだね」

ちよつと残念そうだ。

やわらかくてしっとりした草が気持ちよかった。ひんやりとしていく。目を開けると空がある。青い空。白くて細長い雲が流れていく。そこへチョウがひらひらきてぺっばの鼻にとまった。

「あはは！」

あんなに追いかけてつかまえられなかったのに。おかしくて二人で笑った。

「やあ、楽しいな」

その日は、日が暮れるまでおにごっこをして遊んだ。

「ねー、やまくん、また来ようよ」

ぺっぱとまた来る約束をした。

原っぱは森に囲まれている。でも一か所だけブッシュのトンネルがあつて、そこがぼくの布団に通じているらしい。走り回りすぎて、本当にもうつつかれてねむたくなつたころ、ぺっぱといっしょに部屋へもどつた。

布団に入り直して「おやすみ」を言うと、「にゃあ」と言った。たしかに会話してるんだけど。なんとなくはわかるものの、やっぱりネコの言葉だよなあ。

それから何回か、ぺっぱにさそわれるように原っぱへ行つて遊んだ。

そうだ、ぺっぱは面白いやつだった。

生まれたのはこの六か月前、その年の六月だ。

- - - - -

小説冒頭（一章のみ）

続きは”<http://goodbook.jp/newpage54.html>”に掲載されています。



## （後書き）

最後にぺっぱに会えてほっとする、そんな作品です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0625v/>

---

ぺっぱのトンネル

2011年10月9日11時47分発行